



[https://kanbensato.com/ninwa/kancho\\_200611.html](https://kanbensato.com/ninwa/kancho_200611.html)

語り手 高田ユメヨさん(明治31年生まれ)  
収録・昭和37年8月11日

あらすじ

昔。猿と蟹がいた。猿は柿の種、蟹は握り飯を拾う。二匹はそれを交換し、猿は握り飯を食べてしまう。蟹は柿の種を植え、「早く芽を出せ柿の種。早く木になれば柿の種」と言っている。猿は木に登って柿をもいでおいしいのを食べ、蟹がほしがるのを洗いのを投げつける。蟹は背中がこわれて泣いていた。白と昆布と蜂と卵が出かけてきて「わたしが敵をうってあげましょう」と猿の家へ出かけた。

猿の家に着くと、蜂はハンドウ(水瓶)の中に入る。卵は罫紙の中へ入る。白は天井へ上がる。昆布は板の間に横になっている。

そこへ猿が「ああ寒い」と帰ってきて罫紙裏に当たろうと火を掘ると、卵が「チンとはじいたので、「あっ、痛たた」とハンドウで冷やそうとしたら、蜂がブーンときて刺し

た。走って出ようとしたら板の間の昆布の上に滑りこけた。その上へ白が落ちかかると猿は死んだそう。だから悪いことをしてはいけないよ。

解説

「猿蟹合戦」といえば、知らぬ子どもはいないくらい有名な話であろう。関敬吾『日本昔話大成』で話型を見れば、動物昔話の動物競争の中に「蟹の仇討ち」として登録されており、次のようになっている。

二七A 蟹の仇討 (AT九 参照、二一〇)

A 1、猿の柿の種と蟹の握り飯とを交換する。蟹は種を蒔いて育てる。成熟して蟹が実がもげないでいると猿が現われ、とつてやるといつて欺き、熟したの自分ごとつて青柿を投げつけて殺す。2、子蟹の復讐。3、二五—3以下と同一。(Bは省略) (ここで「二五 猿の夜盗」を紹介しておく)  
1、猿と蟹とが共同で穂を拾って餅を搗く。猿は餅を独占しようとして失敗して

蟹を殺す。2、子蟹が仇討ちを計画する。3、栗、針、糞、白が同情して助太刀する。それぞれその機能に応じて、猿の家の炉(栗)、水場(針)、戸口(糞)、戸口の上の梁(白)に隠れて猿を襲撃して仇を討つてやる。

このようになってはいるが、ここ島根県石見地方の話では、特に仇討ちの応援者がやや変わっている点が面白い。登録話型と共通するものは白だけであり、他は昆布や蜂と卵という意外な顔ぶれなのである。語り手の高田ユメヨさんの話を聞けば、なるほど、それぞれの持ち場での役割は、確かにそれぞれの個性を生かしていることが分かります。

また「猿蟹合戦」ではないが、五大昔話として知られている「桃太郎」の話の中で、鬼ヶ島へ出かける主人公についていく家来は、定番の犬、猿、雉の他に、愛媛県では針や馬の糞があり、広島県では蟹や腐れ縄。岡山県では牛糞、蜂、鉄砲玉といった変わった者も出てくるのである。(元島根大学法文学部教授)